
桃色ほっぺ

ひなたまひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色ほっぺ

【Nコード】

N7988D

【作者名】

ひなたまひる

【あらすじ】

生まれて初めて愛した女は最低女だった。その最低女がトラウマになり、人を信じられなくなった睦月朔の前に、可愛らしい桃色の頬をした少女が現れた。その少女と、睦月朔の、淡い恋物語。そして、時には友情も。

第1話 大雨の中で

生まれて初めて好きになった女は最低女だった。あの女と出会ってしまったのは運が悪かったのか、日頃の行いが悪かったのかはわからない。もしかしたら、これがおれの運命だったのかも。

もし運命なのだとしたら……おれはこの運命を、誇りに思う。運命を呪ったって仕方がないことだから。

運命に従う。逆らう気なんて全くない。

「……つ朔^{さく}！」

大粒の雨に打たれながらそう思っていたが、その思考をかき消すかのように最低女の声が耳に入り、鼓膜を刺激する。

雨の音に負けない彼女の声はすごいと思ったけど、この状況の中で泣かずに居られるおれもすごいと思った。

目の前には愛しい最低女が泣きそうな顔で立っている。その隣では、眼鏡をかけていて頭の良さそうな顔をした男が立っていた。

びしょ濡れのおれと、傘の下でくっついてる二人。無性に腹が立つ。

塾の帰りだった。傘がなくて走ってたら、目の前で口付けを交わすカップルが視界に入って、

「楨^{まき}」

気が付くと呼んでいた。最低女こと槇は体をびくつかせ、恐る恐る視線をおれに移した。

彼女はおれの姿を確認すると硬直し、そして、我にかえって叫んだ。

「……………つ朔！」

——運命に逆らう気なんてないさ。従ってやる。

おれは、最低女と眼鏡男の横を無言で通り過ぎ、雨の音をBGMにして帰った。

おれの運命は最低女と出会い、そして、人を信じられなくなるにとだ。

運命に従ったおれは人を信じられなくなってしまった。

第2話 桜、舞い散る

「あーあ……。おれらも今日から受験生かよ」

新しい教科書をめくっていた時だった。幼馴染みの松坂隆^{まつざかたかし}がため息まじりにそう呟いた。

一瞬、隆に視線を移し、再び教科書に視線を落とす。

「勉強しろよ」

「朔は余裕なのかよ。塾やめたらしいし？」

「それは面倒だったから。全然余裕じゃねえし。高校行けんのかわかんねえ」

嘘だ。おれは幼馴染みに嘘をついた。面倒だったから塾をやめたなんて嘘だ。本当は、塾に行く度にあの日の出来事を思い出し、苦しくなるからだ。

両親はなかなかやめさせてくれなかったが、塾から帰って来たおれが泣いているのを見て、やめさせてくれた。

辛くて、泣いたのだ。あの日の出来事を鮮明に思い出してしまつて、苦しくて。

——好きだったのに。

もしおれがホラー映画に出て来る主人公なら、あの場で楨を殺し、

眼鏡男の前で自分も命をたったことだろう。

だがおれはホラー映画に出て来る主人公でなければ、槇を殺して自分も死ぬなんて勇氣もない。第一、殺す道具がないのだから不可能だ。もし持っていたのなら、それはそれで恐ろしい。

……なににせよ、初めて愛した女に浮気されたことには変わりない。

「重いな」

ショックが重い。

「なにが？ てか朔さあ、最近ぼんやりしてないかあ？ なんかあった？」

「……」

ちらと隆を見る。だがすぐに目をそらした。

ずっと信じてた幼馴染み。いや、親友。それ以上。……それ以上と言つのは別に怪しい意味じゃなくて、家族に近い、そんな存在。

なのに。

どうしておれは、隆を信じられなくなっ たんだろう。

……いや、理由は知っている。槇が……中谷が原因だ。なかにあいつに裏切られたショックは重く、大きく、それ故おれは人を信じられなくなってしまった。

「隆」

教科書を閉じて鞆の中に押し込む。この鞆もこの新しい教科書も、あと一年でお別れかと思うと少し寂しい。

「先帰ってくれるか。おれ、少し残る」

「あ、うん。わかった」

隆が頷くと、おれは鞆を肩にかけて立ち上がった。始業式は終わったし、もう放課後だから帰っても大丈夫だ。

だけとおれは帰らない。やりたいことがあるんだ。

「どこ行くんだ？」

「用事」

「そうかあ。じゃあ、また明日な！」

「おう」

片手を挙げてひらひらと振ると、そそくさと教室を後にした。

校舎を出ると体育館裏へと向かう。体育館裏にある謎の階段をのぼると、桜がよく見えるのだ。眺めが最高。

おれはあそこを秘密基地のようにしていた。あそこなら先生に見つからずに携帯を見れるし、歌を聴いてのんびりサボることだって

出来る。

おれの秘密基地。

「——あ」

風が吹き、桜が舞った。階段の上で、桜のように美しく舞う長い髪が見える。あの長い髪は“なびく”と言うより“舞う”の方が合っている。

——きれいだ。

桜よりなにより、その長い髪の持ち主がきれいだと思った。印象的なのは……

桃色の頬。

「……わあ」

桃色の頬をした女の子がそう呟いた。きっと桜がきれいで呟いたのだろう。

おれは恐る恐る階段を上がっていく。彼女はまた桜にとりこで、おれの存在には気付いていない。

だが、あと三段と言うところで気付いた。

「……あ」

「……どうも」

大きな目に見つめられてなんだか気まずくなってしまったおれは
咄嗟に目をそらした。

「ここは、あなたの陣地？」

吹き出しそうになった。だって、陣地って……この子はもしかや天然なのか？

さり気なく名札を見ると“須川”と書いていた。

“すがわ”……かな。

「別に……陣地じゃない」

「そっかあ！ よかった」

につこりと笑う彼女に見とれてしまった。

「名前、すがわ？」

「うん！ すがわ、だよ。きみは？」

教える必要があるのだろうかと思ったが、こっただけ教えてもらうのは悪い気がして教えることにした。

「睦月」
むつき

「下は？」

「……朔」

「朔ちゃん！」

「え……」

朔ちゃんなんて、幼稚園の頃に隆に呼ばれていた名前だから、なんか恥ずかしい。

須川……かなりガキだな。一年か？

「あーっ、今あたしのことガキだなんて思ったでしょ！」
なぜわかる。

「その目は人をガキだっと思ったときの目だよ！」

どんな目だ。

「これでも二年だもん！」

「につ……二年？」

見えない。どう見ても一年にしか見えない。顔も性格も身長も全部、ピカピカの一年生って感じが……。

「朔ちゃんは何年？ 見た目は三年生だけど……」

「三年だよ」

「ええっ……あわわ。敬語じゃなくてごめんなさい！ 今から敬語

使います先輩！」

慌てて立ち上がった須川は、おれの腕を掴んで揺さぶった。

「別にいいよ……」

「だめです！」

「じゃあ“先輩”って言うのはやめて。なんか嫌だ」

「了解です！」

須川は満面の笑みで頷いた。その須川の周りで桜が舞い散る。

どくん。

胸が高鳴った気がした。

第3話 いつの日か

——須川。

名前は、なんだろうか。もしかしたら“桃子”とかだったりして。なわけないか、とくだらない考えを遮断し、授業に集中することにした。一年、二年とサボって来たぶん、しっかり取り戻さなくてはならないのだ。

——受験生。嫌な言葉だ。

今おれが受験生じゃなかったら、絶対にあの秘密基地に行っていたはずだ。

……須川は。須川は今、あそこにいるのだろうか。それとも教室で真面目に授業を受けているのか……

疼く。あそこに行きたくてたまらない。無意識のうちに貧乏揺すりをしていた。

……だめだ。集中しろ。今おれは受験生なんだぞ。

自分に言い聞かせて貧乏揺すりを止めると、視線を時計に向けた。

あと二分。大丈夫、あと二分くらいなら我慢出来る。

「さ・く・ちゃん」

ぞわりとした。耳元で甘く囁く隆の低い声は、数人の女子には効果があるだろう。だがおれは男だ。その上“朔ちゃん”って……色んな意味でノックアウトだ。

「気色悪いんだけど」

「いやあ、久しぶりに朔ちゃんって呼んでみたくなって」

「……原因はなんだ」

後ろの席に座る隆をちらと見る。隆の息が一瞬詰まった気がした。

「須川ちゃん」

隆は表情を変えずに呟いた。だが、目だけはなにかを探ろうとおれを捉えている。

須川ちゃん。

あいつに、会ったのか。それともこいつは、須川のことを須川ちゃんと呼ぶくらい、前から親しかったのか。

どちらにせよ、顔見知りのようだ。

時計を見る。あと一分もないようだ。あと四十秒程度だろうか。数人の生徒が教科書や筆記用具の片付けをし始める。

「朔ちゃん、このクラスに居ますかって言って来たんだ」

「須川がか？」

「他に誰がいるんだよ。それとも……マジでいるのか？ おれと須川ちゃん以外にお前のことを朔ちゃんって呼ぶような子。案外、男だったりして……」

「ざけんなよ。いるかよ、そんな奴」

「お前が女と話してるとこ、久しぶりに見た」

チャイムが鳴った。鳴りやむまで、おれたちは無言だった。

「それ、どういう……」

「意味かって？ だから、そのまんまだよ。お前が女と話してるとこ……」

「違う。見たのか？」

「なにを？」

「だから、おれと須川が話してたところ」

生徒が一斉に動き出す中、おれと隆だけは動かない。お互い様子を伺うように会話をしている。

「見た」

どこかで女子の悲鳴が聞こえた。女子はいつもうるさいから嫌いな生き物だ。

「後をつけた。そしたら、朔が階段の上で女の子と話してるのを見つけた」

悪趣味。ふとそんな言葉が浮かんた。しかも、その言葉は隆にぴったりだ。

「尾行なんて卑怯だぞ」

「なにが卑怯なんだよ。どこに行くのか気になったからついて行っただけだろ」

だが、悪趣味なものには変わらない。

「そんな趣味やめとけよ」

「なにが？」

「尾行。ストーカー行為。女に嫌われるぞ」

「馬鹿！ ストーカーなんかしねえし、第一趣味じゃねえよ！」

隆と話していたときだった。ふいに視界が闇に包まれた。いや、視界を塞がれた……と言った方が正しいか。

誰かがおれの目を両手で覆っているのがわかる。

「誰でしょうっ」

声を聞いた瞬間、すぐに誰かわかった。

「……須川」

「当たり前です！　すごいです朔ちゃん！」

「ぶっ」

おれと須川のやり取りを見て吹き出した隆を睨むと、まだおれの視界を塞いでいる須川の両手を掴んだ。

須川と目が合う。

——どくん。

なんなんだろう。この胸の高鳴りは。

いつの日か、同じようなことがあった気がする。

第4話 ある晴れた春の日

あれは、雨の日だったか。いや、晴れていたかもしれない。もしかしたら曇りだったのかも。

記憶が曖昧でよく思い出せないが、あいつ……中谷槇ともあの階段で出会った。

桜の季節だった。

「あ。もしかしてここ、あなたの特等席？」

恐る恐る近付くおれに、中谷はそう言って笑った。その笑顔は桜とよく合っていて、おれは思わず見とれてしまったんだ。

中谷槇はきれいだ。だから色んな奴に告白されて、何人もの男と付き合っていたらしい。これは後から知った話だ。

「特等席……じゃない」

女と言う生き物が嫌いなおれは、なるべく目を合わさないようにそう呟く。すると中谷は、おれの頬を両手で優しく包み込んだ。

驚いて身構えるが、中谷は無言で微笑んでいるだけ。

風が吹き、中谷の髪がなびく。シャンプーの香りがした。おれは、その香りに酔ってしまった。

微動だにしない、おれと中谷。二人だけの空間に桜が舞い込む。

中谷はゆつくりとおれに近付く。桜が舞うなかで、おれたちは静かに唇を重ねた。

「朔ちゃん」

唇が離れると、中谷は静かにそう呟いた。

「睦月朔。二年一組。いつもいつしよにいる松坂隆は幼馴染みで、小さい時は朔ちゃんと呼ばれていた。正解？」

「大正解」

「調べたの。一年の時から好きだったからね」

階段の下を見ると桜が敷き詰められていた。一面桜だらけで、絨毯のよう。

「初カノにしてくれる？」

桜の絨毯から中谷に視線を移すと、中谷の頬は桃色に染まっていた。

おれは、そんな中谷を思わず抱き締めた。

「過去の恋愛まで調べたのか……」

「うん。そしたら睦月朔は付き合ったことが一度もないってわかったの」

中谷の体温があたたくくて、このままずっと抱き締めていたいと思った。

「……変な奴」

桜が舞う。

桜が落ちる。

その繰り返しの中で、おれと中谷は再び、唇を重ねた。

そうだ、思い出した。

あの時は確か、晴れた。雨が降ってなど、曇ってなどいない、気持ちの良い晴れた春の日だった。

これが、おれと中谷槇の出会い。

第5話 眼鏡男、参上

同じ中学にいるわけだから、当然中谷と遭遇することがある。それは承知していた。

だが、あの眼鏡男がこの中学にいて、まさか遭遇するなんて全く予期していなかった。

「睦月」

弁当を食べ終えて、隆と、なぜか須川もいつしよに屋上で寝転んでいた時だった。

ふいに声が出て、しかもそれはおれの名を呟いた。

おれは寝転んだまま声のした方へ視線を移す。そこには、あの日の眼鏡男がいた。

一瞬にして凍り付く。

隆は声を潜めて、誰？ と訊いて来たが、おれには答える余裕がなかった。

慌てて起き上がったおれを見て、眼鏡男はくすりと笑った。そんな奴の態度に腹が立ち、睨む。

「睨むなよ。女とられてイラついてんのか？」

揶揄のこもった口調に更に腹が立つ。眼鏡男を睨むおれの隣で、

隆と須川は声を揃えて

「え」

と言った。

「ごめんね、とっちゃって。でもおれは悪くないから。あいつから来たんだし」

その挑むような奴のまなざしも、揶揄のこもった口調も全て、苛立つ。だがその苛立ちはすぐに驚きと空しさと敗北感に変わった。

——あいつから来た？ そんな、まさか……

「お前に飽きたんじゃないの？ だからおれのどこに来たのかもな」
隆と須川が慌てている。そう言えばこの二人、前から親しかったわけじゃないそうだ。最近初めて話したらしい。

この状況で軽く現実逃避。馬鹿みてえ。

「……だったらなんだよ」

「残念だったね」

眼鏡男はおれたち……いや、おれに背を向けると、片手を挙げてひらひらと振った。

「宮木智^{みやぎちひろ}。覚えとけ」

眼鏡男——宮木は、一瞬おれを振り返って、扉に向こうに消えて行った。

「須川」

呼んだのはおれ。

「は、はい」

「そう言えば、須川の名前なに？ 桃子？」

「小百合さゆりですよ」

はずれか。

「おい、今の奴の話……」

隆が恐る恐るおれの顔を覗き込む。

「マジ話。おれ、中谷にフラれた。ていうか浮気された」

隆の動きが止まる。

おれと中谷が付き合っていたことを隆は知っている。だが、別れたことは言っていなかった。

須川を見ると目が合った。須川は無言で、おれを見つめている。時折隆に視線を移して。

こいつらは今、なにを思っているのだろう。おれを哀れんでいる

？　もしくは中谷に怒りを感じている？

恐らく前者だろう。

こいつらはきつとおれを哀れんでいる。そして同情するんだ。

「同情はいいから」

そう呟くと、おれは扉を開けた。そして扉の向こうへ一歩踏み出した時、隆の声が聞こえた。

「中谷ちゃんの浮気相手、あいつ？」

ノブに手をかける。

「そ。宮木智」

そして静かに扉を閉めた。

第6話 例え神様でも

宮木智。おれはあの出来事で宮木智と言う人物を心から嫌った。

女とられて馬鹿にされて、挙げ句の果てに嫌なことまで聞かされたんだ。もう心から大嫌いだ。顔も見たくない。思い出しただけで腹が立つ。

きつと、こんなに人を嫌ったのは生まれて初めてだ。

そして、頭に血がのぼると言うような感覚に襲われたのも、今日が初めてだった。

「――げ」

音楽室へ行くために隆と廊下を歩いていた時だった。隆が急に立ち止まり、一点を見て顔を歪ませている。

「変な顔」

「うるせ」

隆が見ているところに視線を移す。だが、それとほぼ同時に、隆がおれの視界を塞いだ。

「……なに」

「べ、つに」

動揺してる。

——馬鹿か、こいつ。今まで何年いっしょに居たと思ってんだよ。

おれは隆の肩を掴み、抱き締めるようにして引き寄せた。するとおれの視界から隆が消え、変わりに、隆がおれの視界を塞いだ理由が見えた。

——なるほど、ね。

「きゃあきゃあ」

「うるさい」

ふざけて、おれの腕のなかで女の真似をしている隆の頭を軽く叩く。そして——中谷槇と宮木智が手を繋いでいる姿に視線を移した。

隆、感謝。

気をつかってあの二人の姿を見せないようにしてくれた隆に、心のなかで感謝する。声にして出すのは気恥ずかしい。それに隆ならわかってくれるだろう。

ふいに宮木と目が合った。すると宮木は、待ち望んでいたと言う風に目をぎらつかせ、そしてにやりと笑う。

絶対なんか企んでる。

宮木が中谷を引っ張っておれたちの方へと歩み寄って来た。中谷は途中でおれたちの姿に気が付き、その瞬間に顔が引きつった。

「こんにちは、睦月くん」

かなり猫を被った話し方で宮木はそう言った。鳥肌が立つ。

「普段通りでどうぞ」

あまりにも気味が悪かったからそう言うと、返って来たのは

「あつそ」

だった。

こいつ……

「なあ榎、こいつに教えてやれよ。どうしておれにしたのか……」

「やめろよ!」

隆が怒鳴った。泣きそうな顔をして宮木を睨んでいる。そんな姿におれは少し感動。

宮木は相変わらず嫌味たっぷりな面をしている。

「んん……友達はいいいねえ。お前、女よりも男と戯れてる方が合つてんじゃないの?」

こう言つ奴は無視すればいいんだ。いちいち反応するから調子に乗るんだよ。

おれは隆に目で合図をして歩き出した。

「——お前の親友はお前に似てる。まるで雑魚だ」

宮木の悪魔の囁きで、おれのなかの何かが切れた気がした。おれは立ち止まり、振り返った。そして宮木の肩を掴む。

「馬鹿にするならおれだけにしろ」

感情もなにもない目で宮木を見つめる。空気が凍り付いたように、隆も宮木も、中谷も動かない。

「あまり、調子に乗るな」

とびきり低い声。

「さ、朔……」

初めて中谷が口を開いた。中谷は、色々な感情が入り乱れた複雑な表情でおれを見ている。

おれは中谷と目が合ってもすぐに視線をそらした。今は宮木が優先だ。

「ベタな上にクサイかもしれないけどな、おれの親友を雑魚呼ばわりする奴は、例え総理大臣でも神様でも——許さない」

おれたちの周りだけ空気が違う。そう感じるのはおれだけだろうか。

「……朔、ありがとう」

隆が真顔で言っ て来たもんだから、おれは思わず赤面してしまっ た。

「別に……」

「こいつ照れてる!」

「う、うるさい!」

おれと隆のやり取りを見ていた宮木は、中谷の手を掴み、無言で歩いて行っ た。その光景を眺めたあと、おれたちは顔を見合わせて笑っ た。

「おみごとです!」

笑っ ていたところに、いつから居たのか須川が飛び込んで来た。なぜかこいつは、最近よくおれたちのところに来る。

「朔ちゃんおみごと!」

おれと隆は目を合わせ、しばらくの沈黙のあと、同時に吹き出した。

第7話 放課後の教室

「デートしませんか」

カイロを持つてくればよかった。今日は馬鹿みたいに冷え込んでいる。手がかじかんでいて上手く文字が書けない。それは手がかじかんでいるせいだけなのか、須川の『デートしませんか』の言葉のせいでもあるのか、自分のことなのによくわからない。

久しぶりに宿題が出た。教科は英語だ。最近、英単語をよく忘れていた生徒が多くなっているらしく、ひたすら英単語を練習すると言った地味なくせに過酷な宿題が出たのだ。

その地味なくせに過酷な宿題をしている最中だった。場所は教室。そして放課後。いつもいる隆は不在。変わりにとでも言うように須川がいる。

「聞こえてますか？」

「聞こえない」

「聞こえてるじゃないですか」

手が疲れてきたが、おれはひたすら英単語を書く。早く宿題を終わらせて帰ろう。でないと寿命が縮まる。

こいつのせいで。

いきなりなんなんだよ。デートしませんかだなんて、軽々しく口

にするもんじゃない。

「それは好きな人にだけ言う特別な台詞だ」

「『デートしませんか』のことですか？」

筆箱から消しゴムを取り出しながら頷く。

「それなら言ってもいいですよ。もう一度言います。デートしませんか？」

取り出したばかりの消しゴムがおれの手から離れ、床へと落ちて転がった。

い、今なんて……

「あんなあつ……人をからかうのもいい加減に——」

「からかってません。デートしませんか？」

須川小百合。すがわさゆり。スガワサユリ……。こいつの考えることがわからない。

消しゴムを拾って恐る恐る須川を見ると、いつも以上に頬を桃色に染めていた。

嘘だろ……。

「嘘だと言ってくれ」

「嫌です」

「それはつまり、さり気なく告白してると言うことだよな」

「そうですね」

「おれのこと好きだと言うことだよな」

「そうですね」

ものすごく遠吠えをしたい気分になってしまった。富士山に向かって遠吠えがしたい。なんだったら隆にでも遠吠えを……

「恥ずかしいです」

そんな呑気に言われても困りますです。こっちが恥ずかしいです。ます。

あまりにも動揺し過ぎて言葉が変になってしまった。

ですますって……。

「んと、おれはさ、人が信じられないわけで、だからたぶん、今のおれはきつと、あんたを信用してないと思うんだよ」

泣かすまいと慎重に慎重に話していく。

「だから、こんな奴なんかやめた方がいい……と……」

「朔ちゃんのどこがいいのかわからないけど、あたしはたぶん、朔

ちゃんの全てが好きなんです。それに、朔ちゃんが人を信じられるように……あたしが朔ちゃんを変えてみせます」

どくん。

「……だめですか」

……須川。おれのどこに惹かれたんだ？ 嘘なんじゃないのか？
あとから『冗談だよ』って言うオチなんじゃないのか？

最悪だ、おれ。本当に人を信じられなくなってる。いや……これくらいなら誰だって思うか？ だけどこんな真剣な顔で、頬を染めて一生懸命に告白してくれたのに、信用出来ないなんて……最低だよ、おれ。

中谷と同じくらい最低だ。もしかしたら中谷以上に最低かもしれない。

裏切り。

信頼。

裏切ると、信頼出来ないのは、どちらの方が罪は重いのだろうか。もしどちらか一方を死刑にするとしたら、裁判官はどちらを死刑にするのだろうか。

——おれは。おれだったら、どうする。

「朔ちゃん？」

そうだ、こいつは？ 須川だったら、どちらを死刑にするのだから

う……。

訊いてみたい。

訊いてみようか。

……いや、だめだ。

「ごめん、須川。きっとあんたには……荷が重すぎる」

「そんなことないです!」

すぎるようなまなざし。だけどおれは、そのまなざしを受け入れることが出来ない。受け入れてしまったら、須川が苦しくなる。絶対に。

英単語を見すぎて疲れた目に窓の外の景色をうつす。もう夕焼けが沈みかけている。

こいつを早く帰さないと。暗くなると危ない。

「……帰ろっ」

呟くと、宿題と筆記用具を鞆の中に押し込む。なるべく須川の顔を見ないようにして。

「time limit……」

「……え?」

「タイムリミットは、朔ちゃんが卒業するまで」

思わず須川と目が合ってしまった。さっきとは全然違う真剣なまなざし。

おれは、夕焼けよりも彼女の瞳に見とれてしまった。

第7話 放課後の教室（後書き）

こんにちは。ちゃんとプロットとやらを書いておけばよかった……と後悔している日向まひるです。小説は書き慣れてないので展開とかぐちゃぐちゃですが、それでも「読んでやるよ！」って方は、どうか最後までお付き合いよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7988d/>

桃色ほっぺ

2010年10月26日07時31分発行